

## ▶ 高等教育機関を考えるシンポジウム 〈概要〉

日時：平成25年3月3日（日）

午後2時～5時30分

場所：飯田女子短期大学 講堂

（長野県飯田市松尾代田 610 番地）

主催：南信州広域連合



### ●開会あいさつ（広域連合長：牧野 光朗）

リニア中央新幹線が東京から名古屋まで、14年後の2027年に開通し、この地域に駅が設置される見込みとなってきました。当広域連合が平成22年度に策定した「リニア将来ビジョン」では、地域の将来を担う人材の確保が最も重要な課題の一つと考えています。我が国の18歳人口は更なる減少を続けており、高等教育機関の設置や運営は非常に厳しい環境となっていますが、こういうときこそ、地域の振興に必要な施策を勇気を持って展開していくことが必要だと考えます。今回のシンポジウムで様々なご意見を伺い、課題に対する理解を深め、問題を共有化し、地域全体で高等教育機関の設置について考える契機としたいと思います。

### ●経過説明（南信州広域連合 総務文教消防部会長：岡庭 一雄）

飯田下伊那地区に、大学を含む高等教育機関をという思いは長年の懸案事項であり、当広域連合でも検討を重ねてきました。広域連合が今年度行った地域へのアンケート調査の結果からも、高等教育機関設置が重要な課題であることが表れています。今、新たな地域活性化施策が求められていることと、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線といった高速交通網による大転換を間近に控えた中、改めてこの問題を重要な課題としてあげたところです。この地域の産業について、より高度な技術開発を担う人材や新しいイノベーションを生み出すための専門的な知識集団の形成、そしてこれから来るであろう知識基盤社会への対応など、地域づくりに新しい視点から取り組み、これを発展・発信させることが望まれています。しかし、高等教育機関設置の要望は、その形態や分野について統一されていません。本日、当地域でご活躍されている異なる分野の皆さんのご意見を聞き、高等教育機関への扉を開く位置付けとし、今後の具体的な検討に入りたいと考えています。

## ■ 基調講演

東京大学大学院教育学研究科教授 牧野 篤 氏

テーマ「地域社会と大学 ― “新しい” 社会の高等教育のあり方を考える ―

### 変革する時代と新しい価値の創出

日本は、これから先100年をかけて人口が3分の1になると言われています。2000年代以降、それまでの日本を支えた製造業は影を潜め、第3次産業と呼ばれる金融・保険業の経済活動の大きな伸びによって日本のGDPが支えられるようになりました。非正規雇用が35%を占め、正規雇用はますます減り、働くことの意味が変化しています。国は生涯学習を推し進め、行政の負担を減らして住民自治により地域を治めることを理想と位置づけました。東京大学卒業生の25%が就職できず、いわゆる受験学力の頭が良いだけでは企業に必要とされなくなっており、東大生の最も苦手なコミュニケーション能力が重視されるようになってきました。各国立大学は文部科学省から地域密着型となることを求められています。一つの動向として、インターネットの劇的普及で「一億総発信者時代」の今、地域社会や農村に新たな価値を見いだす若者が増えています。彼らは農家になるのではなく、農業的生活を送ることでその地域の文化を掘り起こし、そこに新しい価値を付加して発信しています。こうした活動から、かつて限界集落と呼ばれた地域で人口が増え始めた例も現れています。消費者でありながら生産過程にも関わる「プロシューマー」により、自分たちの欲しい物は自分たちで作り、これを発信しさらに新しい価値が生まれるようになりました。福祉についても、税金によって大量のお金を回していく時代ではなくなり、世界から福祉モデルとされてきた北欧は、人々自身が社会へ出て活動し、様々な価値を作り出すことで、健康寿命を延ばす方向へと転換しています。こうした動きに、日本もならざるをえないのではないかと思います。

### 地域を豊かにする大学像

飯田下伊那に大学を設置することを考えるとき、従来型の18歳から22歳の人を対象として人を集めていくのか、企業が求める人材育成に特化した秋田県の国際教養大学や、多数の在学生による大きな経済効果を生む山梨県の都留文化大学といった学校作りを目指すのか、あるいは(大きな話になりますが)ケンブリッジ大学のようにまちぐるみで支える大学を目指すのか、方向性を検討しなければなりません。そして、何を大学の中心に据えるのか。これまでのように国が地方を引っ張っていく時代ではなく、今は地域から上げていくような時代であり、地域の人々の潜在力を高め続けられる仕組みを考える必要があると思います。飯田下伊那地域は住民自治の歴史から、人々が高い意識を持っており、広い文化交流によるいろいろな人の連携が既に構築されています。こうした住民全体が参加しながら様々な価値を作り出し、それを実体化・事業化して新しい産業を作り出していくような、地域のための大学であって欲しいと思います。また、公民館活動が盛んで学びが好きな地域であり、研究や情報交換も活発で、多くの人がこの地域のことを知っています。山椒のように小粒でもびりりと辛い企業が立地していて、この地域の特色を作っています。こうした背景をベースに、この地域から世界一のものを各地へ発信できるようになるという視点から、高等教育を考えたらどうかと思います。そのとき課題となるのは、社会デザインをどうするかということ。従来のような一過性の物をどんどん作り続ける社会を作るのか、あるいはじっくりゆっくりと、しかししっかりとしたものを作り出していくながら、お互いに関わり合い豊かに生きていけるまちを作るのか。人々が幸せに生きていくにはどうしたらいいのか、どういうものが必要になってくるのか。こういうことを学べるよう、大学がこの地域を豊かにしていく糧になるよう考えることが、これからこの地域に求められていくのではないのでしょうか。

## ■パネルディスカッション

テーマ「リニア時代を見据え、地域の将来を担う人材を育成する高等教育機関について」

### 【パネリスト】

- ◆萩本 範文 氏 多摩川精機(株) 代表取締役社長
- ◆川上 恒夫 氏 飯田女子短期大学 学長補佐
- ◆市瀬 武彦 氏 飯田医師会 会長
- ◆下平 隆司 氏 伊那谷研究団体協議会 会長
- ◆牧野 光朗 氏 南信州広域連合 連合長

### 【コーディネーター】

- 羽場 睦美 氏 (財)野外教育研究財団 理事長

### ○羽場氏

現在この地域が置かれている状況を、それぞれのお立場からお聞かせください。

### ◆川上氏

学長不在であり、一教員の考えとしてとらえていただきたいと思います。当短大は、昭和 42 年に開校し、現在では専攻科を設け4年制大学並みの学位取得も可能という、短期大学としては全国でも数少ないプログラムを備えています。実際には資格取得がメインと据えられており、典型的ともいえる学科構成は外部からも良い評価をいただいています。

### ◆市瀬氏

平均寿命が男女ともに全国1位と報道発表されたことは大変名誉なことです。予防接種の接種率も全国一高く、この地域の市町村の熱心な取り組みと住民の健康に対する高い意識の表れといえます。医療過疎地という指摘もありますが、人口 10 万人あたりの医師数では県内第7位の高比率であり、また、休日夜間診療所が機能しいわゆる「たらい回し」のない地域となっており、こうした飯田モデルというべきものは全国へ発信できると思います。

### ◆萩本氏

日本経済の現状は、貿易赤字が恒常化し経常収支も危うい状況であります。その日本は産業のデザイン戦略に誤りがあったとみています。デザインとは意匠という狭義な意味ではなく、人々に感動を与える全てのものであると思います。高度なデザイナーを育成し、デザイナーの力を引き出すようなビジネスモデルに変わらない限り、日本の製造業の復活はないと思っています。この地域にリニア新幹線が開通したときに起こる特別な変化とは、飯田が山手線の内側に入り、名古屋市内になるということです。この飯田にこの国の大きな課題を持ち込んだとしても何の違和感もない、そのくらいのとらえ方をしないと、単に新幹線が通るだけのまちになってしまいます。私はこのまちに社会的ニーズの大きいデザインの最高学府を作り、世界的デザイナーを育て、デザイナーの集う国際交流のまち、日本の代表的デザインを発信できるまちを作りたいと提案します。そうならば、飯田の存在感は高まり、人材の出て行くまちから入ってくるまちへと変わるだろうと思います。

### ◆下平氏

伊那谷は日本最大の谷であり、多様な生物・自然に恵まれ特色のある歴史と文化が育ち、この自然と文化の宝庫は全国的にも価値のある貴重な財産といえます。こうしたものを学術的に探求する学問である地域学を総称して伊那谷学と呼びます。当協議会では毎年シンポジウムを開催し、参加団体の横の連携を深め、残すべき自然、文化を考える活動を行っています。こうした活動を

通じて地域の人材育成に寄与しようとしていますが、若い世代の参加が極めて少なく、後継者の育成が難しいという環境にあります。グローバル化の時代とはいえ、地域を想い、地域を考え、郷土を愛する若い世代が育つことが大事であると思います。そのためにも、郷土愛を醸成する人材育成の仕組み、学校の先生方への地域学の教育システム、郷土研究者や公民館との連携・活用が望まれます。地元の者が主体性をもって伊那谷学を深め、高付加価値の構想に向けて地域を発信できるシステムを構築していくことが課題です。

#### ◆牧野連合長

この地域にとっての課題は、高校卒業者の7割以上がこの地を離れて戻ってこない状況にあるということです。これを何とか戻ってくるようにしたい。何よりこの地域に戻ってきたいと思う人づくりが重要で、小さなころから地育力によって心豊かに育てていけるよう考えています。大学との連携については、南信州飯田産業センター内の産業技術大学で、明治大学や東京理科大学と連携しながらものづくり人材の育成をしています。また、信州大学工学部の大学院コースが同センターに置かれ、当地域に住み、働きながら大学院の修士資格が取得できる仕組みがつくられています。体験教育旅行にも取り組んでおり、前年は約2万人の小中学生が当地を訪れました。フィールドスタディでの大学生・院生受入れは、平成24年度は16大学約550人で、大学とつく器はないものの、学びの場の提供という意味では既にこれだけの学生が入ってきており、この地域が持っている学びの力は非常に大きなものがあると思っています。ほかにも、知のネットワーク「学輪 IIDA」を組織し、現在27大学72名の専門家、大学教授、研究者の皆さん方に参加いただき、地域課題解決のため、産業づくり、地域づくり、人づくりについて連携しており、全国から注目されています。まだまだ器としては十分ではありませんが、大学が本来持っている機能は、この地域に幅広くいくつも出てきています。

#### ○羽場氏

長年、高等教育機関について検討してきたこの地域について、今こそ機が熟してきたと感じます。緊急の課題と将来の人材確保を含めて、ご意見をお聞きしたいと思います。

#### ◆川上氏

当校の生徒数は約600人で、この学生たちによる地域への経済効果は年間15億円くらいはあるとみています。この40年間、地域への人材供給という面も含めて、かなりの経済効果で地元へ貢献してきたのは事実だと思います。学校経営は学生からの授業料と国からの補助金で成り立っていますが、国の教育に対する補助金額は少なく、学生が集まらなければ経営は困難であり、学生募集には苦勞しています。これまで地域の方々に支えられ、企業としては優良企業として存在してこられました。今後18歳以上人口が減っていく中、現状のシステムだけでは難しくなると考えています。

#### ◆市瀬氏

看護師不足は深刻な課題であり、医師会でのアンケート結果からは、このままでは10年後に運営できなくなる診療所も出てくる状況です。かつて当地域には准看護学校がありましたが、当時は定員割れが続いて経営困難となり閉鎖されました。しかし今、上伊那の准看護学校では、30人定員の所に70~80人も応募してくる状況となっています。その背景には、介護施設の増加で看護師の配置が必要となったことや、子育てが一段落した主婦や、家庭の事情などで30代になってから入学される方など、新卒以外の生徒が全体の半数を占めるといった社会的ニーズの変化が

あると考えます。この地域にも准看護学校を作り、社会のニーズに応えながら看護師不足に対応したいと考えています。

◆萩本氏

高等教育機関ということについて、思い違いをしては困るということが一点あります。それは、高等教育機関と地域の人材ということをあまり短絡的に結びつけると、考え方が非常に狭くなってしまふということです。先ほどデザインの提案をしましたが、地域にもたくさんのニーズがあります。例えば Apple 社の iPhone は、金属切削の風合いをデザインへ強調し成功しましたが、物作りにデザイン力を加味することで下請け仕事から商品開発・自立へとつながっていくと思います。精密機械産業が大変な危機に瀕している今、新産業の振興が大きなテーマであり、若い人の関心を集めるように仕向けることが大事だと思います。当社はバイオの仕事を始めたところ、全国から学生がエントリーしてくれるようになりました。若い人はバイオや宇宙といった未知へのあこがれや探求心が旺盛だからこそ全国から集まる。この地域で人材を育成したら地域に残って活躍してくれると短絡的に考えるのではなく、この地域に魅力ある新産業をどうやって作るかということを考えていかないと、高等教育機関の意味も薄れるのではないかと思います。

◆牧野連合長

将来のこの地域については、リニアによって1時間程度で羽田やセントレアといった国際空港まで到達できるという中で、素晴らしい自然や人情味あふれるこの地域に定住しながら、大都市や世界へ打って出るチャンスがやってくるということです。リニア将来ビジョンでは、小さな世界都市、高付加価値都市圏を掲げています。この地域にどのような産業が集積していくかを考えると、単なるものづくりでなく、知識集約型の産業が必要になります。人の動きを早めるリニアをうまく使い、大自然を持つ飯田下伊那に知的集約を図り、リフレッシュ空間を大事にするデザイン人材などの専門家の研究機関の集積も夢ではないと思っています。

○羽場氏

この地域は良いものを持っていながら地元の方がそれに気づいていないとよく言われますが、活用しないともったいないと思うことがありましたらお聞かせください。

◆市瀬氏

飯田下伊那は自己完結型の医療圏であるということです。他地区の方でこの地域へ来て医療を受ける患者が5%、他地区へ行って受ける患者が5%ということです。例えば上伊那では流出する患者が25%、流入する患者が5%で流出型ですが、松本や佐久は流出が5%で流入が25%であり大きな経済効果を生んでいます。我々は地元出身で、他地区の大学で教授になったような方とのつながりを作っていきたいと思っています。これこそ知の集積だと思います。

◆牧野連合長

この地域では健康長寿ということで世界に誇れる取り組みがなされています。こうした安心安全が守られているということが一つの強みとなって、新しい産業、知識基盤をつくっていけると思います。

◆下平氏

この地域は生涯学習、課外教育、公民館活動が良いといわれますが、それは地域のコミュニティが非常にうまくいっているということだと思います。しかし、このまま将来にわたってこれがつながっていくかというところちょっと疑問があります。住民の意識がその良さを知り、コミュニティと社会教

育の大切さに気付いていないと感じます。リニアに向けて当初はインフラ整備に投資されると思いますが、人材育成のための投資も合わせて考えていただくよう行政の皆さんにお願いしたい。

◆萩本氏

少子化時代に新しい大学を作るということは至難の業だと思います。これを地域論理で考えてもまず成功しないだろうと私は思います。特徴のある、専門性の高い突出した機能を持った大学院大学などを考える方が成功率は高いと思います。デザイン力のニーズは、全国の名門大学が新しい学部創設に動き出したことに表れています。飯田にはこれら大学のさらにその上に立つような最高峰の高等教育機関としてのデザイン学府を作りたいというのが私の悲願です。

○羽場氏

皆さんのお話から、集中と選択で多様性を確保するようなネットワークをうまくこの地域に引き継いでいくことが大事かと思います。最後に牧野講師から助言をお願いします。

◆牧野氏

3つの産業というイメージで考えることができると思います。ひとつは、大学というものが地場の産業となるかならないか。各地の大学の成功事例は、地元の産業として位置づけられています。もうひとつは、新しい産業を作ることとリンクしていく必要性で、大学が拠点になって地域の経済を引っ張っていきける研究家を育成するという。そしてもうひとつ、出て行く人が帰って来るといった循環を作り出すこと。一旦養成した学生たちが出て行った社会で活躍し、再び帰ってきて新しいものを吸収し、また社会へ戻っていきけるような場所。そこに市民も入ってくるようになる。今日の話ではデザインが地域活性化の核となるというお話が中心にありましたが、大学だけがデザインに力を注ぎ、そこだけが地域を引っ張っていくことは難しいと思います。大学のある地域そのものがデザイン性に富んだものを理解できる人々で埋まっていけないと、大学の力がついてきません。自分たちが作り出したものからあらゆる循環を作り出し、地域全体の底上げを図っていきけるような拠点としていく。そこに大勢の住民がかかわっていきけるような仕組みを作る必要があります。そうすれば、医療の問題や地域の研究団体の方々との連携も組んでいきける形になるのではと受け止めています。ここでの議論をたたき台にして、これから皆さんの中で議論を進めていただければと考えています。

## ■全体討論

### ▲会場質問

具体的にどのように取り組んでいくのか。また、大学設立までの間だけでも、資格取得のための教育機関は必要ではないか。

#### ◆萩本氏

物事には目的と手段ということがあり、目的は非常に分かりづらいので皆、手段をその目的だと思いこむことが多いと思います。何のために、どういう大学がここに欲しいかという論議を熟成しない限り、大学の論議を深めることはあまり意味がないことだと思います。



#### ◆牧野連合長

そもそも大学とは何かということだと思いますが、大学の果たす機能ということについては、すでにこの地域に出てきています。既存の大学と競合するような形のものをつくるというのはなかなか難しい。しかし、大学にとっても地域にとっても WIN-WIN の関係になるような仕組みを、全国モデルとしてこの地域がつくっていくことはできると考えています。

#### ○羽場氏

広域連合が立ち上げる3つのプロジェクトの中で、この課題をどう考えていきますか。

#### ◆牧野連合長

プロジェクトの中身はまだこれからであり、このシンポジウムはひとつのスタートと考えています。ここでの議論を踏まえて、また広域連合の中で検討し、それを様々な産業界や住民の皆様と、あるいは大学関係者や学輪 IIDA の中でも、地域としての議論を煮詰めていきたいと考えています。

#### ◆川上氏

この地にある高等教育機関として、社会貢献をいかにしていくかは非常に大きな問題だと思っています。この先、男女共学とか4年制大学との連携、手を結んでくれる4年制大学があれば、手を結びながら地域の方々に教育などで貢献できたらと考えています。

#### ◆牧野氏

産業を興すのはなぜかということをお問いたださなければいけないと思います。飯田女子短大が地元の需要をうまく受け止めながらきちっと学生を養成していることは価値があることで、だからこそ経営が成り立ってきたのではないかと思います。この地域に高等教育機関を置くのは産業を興すためであるなら、その産業を興すのはなぜかということを少し突き詰めていただきたいと思います。そこから逆算して考えていけば、こういうものがあつた方がよいという議論になり、そうした議論をこの地域に巻き起こしていただきたいと思います。

### ●閉会あいさつ（副広域連合長：伊藤 喜平）

基調講演の牧野先生から、含蓄あるお話をいただきました。特に私たちの問題として、これまで一生懸命やればいつかは効果が出るという時代だったのが、成熟した社会、グローバル化、高齢化社会

を迎えて、これを乗り切るにはいち早く意識改革をして良いスタートをしなければならないということが再確認されました。パネルディスカッションでは、各界各所のトップランナーの皆さんからのお話、ありがとうございました。今の形態を守ろうとするだけでは防ぎきれない、攻めに転じる必要があるというお話がありました。まさにそのとおりです。リニア時代を迎えての人材育成に、高等教育機関を含んできちんと対応するスタートの年となっています。本日のシンポジウムで与えられたいくつものエキスを無駄にしないように、さらに多くの皆さんのご意見を頂戴しながら、だんだん築き上げていくスタートの日とご理解いただきたいと思います。皆様方の本当に熱心なご参加に感謝申し上げます。